

渡邊 驩兄弟が逝去される

—主の業の見証者として歩んだ、90年の生涯—

20 22年12月21日、日本の教会歴史において大きな役割を果たした開拓者、渡邊 驩兄弟が逝去された。享年90であった。告別式は12月28日に神奈川ステーキ大和ワードで行われ、驩兄弟を慕う多くの人々が見送った。Zoom 配信にも日本の内外から多数が参加した。

渡邊 驩兄弟は1932年(昭和7年)3月23日、石川県小松市に生まれる。彼が通った小松高校ではハワイから来た宣教師が英会話を教えていた。英語に強い関心を持ち学んでいた渡邊少年は宣教師に接して「この人たちの言うことはうそじゃない」と直感する。「御霊の導きでした」と後に驩兄弟は振り返っている。

1950年4月、白山の雪解け水が流れる手取川でバプテスマを受けた驩兄弟は、石川県で最初の改宗者となった。

1953年3月、最初期の日本人専任宣教師の一人として召される。後に驩兄弟の伴侶となる白井八重子姉妹も4月に召され、日本伝道部で同時期に奉仕した。

1956年から翌年にかけて行われた『モルモン経』^{※1}改訂プロジェクトでは、翻訳者の佐藤龍猪兄弟のアシスタントを務めた。

1957年12月、日本伝道本部(現在の東京神殿の場所)にて八重子姉妹と結婚、



渡邊 驩兄弟



1973年、日本西部伝道部を訪れたキンボール大管長夫妻を迎えて

5人の子供たちに恵まれる。

日本で初めてハワイ神殿への団体参入が行われた1965年、北部極東伝道部会長会第二顧問を務めていた驩兄弟は、ドゥエイン・N・アンダーセン伝道部会長を助け、日本人会員が神殿参入に備えるのに尽力した。

1967年4月に来日したヒュー・B・ブラウン管長の通訳を務めたのも驩兄弟であった。この説教は後に「ブラウン副管長

の預言」として語り継がれるものとなる。

1968年にはアジア初の東京ディストリビューションセンターが開設され、教会の文書や書籍が日本語、韓国語、中国語に翻訳され始める。驩兄弟は極東地区担当の翻訳事業部長に就任する。

1970年3月、日本万国博覧会にモルモン館を出展した教会は、公開に先立ち記者会見を開く。原稿の準備がなく、150人の記者に囲まれて臨機応変に展示の解説をしたのは驩兄弟であった。同年、日本人初の伝道部会長として日本西部伝道部に召され、福岡の伝道本部(現在の福岡神殿の場所)へ家族で赴任する。

1975年8月、日本武道館で日本地域総大会が開かれ、驩兄弟は大会準備委員会会長、またスベンサー・W・キンボール大管長の通訳を務めた。この場で日本東京神殿の建設が発表される。その瞬間の歴史的フィルムには、「全アジアのため、日本の東京に神殿を建てることを提案いたします」と通訳する驩兄弟の、張りのある声が収められている。1980年の東京神殿奉献時にもキンボール大管長の通訳を務めた。

東京神殿、第二期(1982-1985)の神殿会長会で、驩兄弟はアドニー・Y・小松神殿会長の第二顧問を務める。その後も1996年、ゴードン・B・ヒンクレイ大管長来日の際の通訳を務めるなど、日本の教



1954年の宣教師大会にて、白井八重子姉妹と渡邊驩長老(中央)



1967年4月20日、大阪の阿倍野支部でのブラウン管長の通訳



日本西部伝道部会長として福岡に移住した渡邊ご家族

※1—現在の『モルモン書』。1909年(明治42年)初版の文語訳日本語版を、分かりやすい口語訳にする大改訂で、戦後の伝道の大きな推進力となった

1996年5月18日、東京でのファイヤサイドでヒンクレー大管長の通訳をする渡邊 驩兄弟



1954年8月29日、大阪の中之島公会堂で開かれた南中央地方部大会にて。前列右から4人目はハロルド・B・リー長老。2列左から2人目は渡邊 驩兄弟



会歴史の立役者として生涯を歩んだ。晩年は、結び固め執行者として東京神殿での奉仕を続けた。

1954年8月、当時十二使徒であったハロルド・B・リー大管長が来日し、22歳の宣教師であった驩兄弟は南中央地方部大会で通訳を務めることになる。後に多数の中央幹部の通訳を務めた驩兄弟の、生涯2度目の通訳であった。

うまくできるかを心配した驩兄弟は、前日にリー長老のもとへ出向き、翌日の話のアウトラインを教えてくださいのように頼ん

だ。ところがリー長老は驩兄弟の目を見てただ一言、"If you and I get the same spirit, there won't be any difficulty." —後に驩兄弟はこう語る。「『あなたとわたしと同じ御霊を受けたら何も心配ないですよ』と。言われたなあ、と思いました。きっとそういう風に言われるだろうなあと思った同じ言葉が返ってきたんです。それで、ますます心配になりました。」

その晩、泊まった淀川女子商業高校の固い床の上で、驩兄弟はまんじりともせず、夜中に何度も祈った。

そして翌朝、聖霊の導きを得られるよう

真剣に集中して通訳に臨むと、思ったよりもうまく訳せた。ところが、自分は結構できていると自負したとたんに、通訳は滞ってしまうのだった。—長男の渡邊 潔兄弟は告別式でこのエピソードを紹介し、「父は、自分の思いよりも、聖霊の導きによって神の意思を優先させることの大切さを学んだのです」と語った。

「神様は不思議なことをなさいます」と生前、口癖のように言っていたという驩兄弟。その一生は、日本の教会歴史とともに歩む、まさに不思議な驚くべき主の業の見証者としての人生であった。◆

今月のNews Headlines

● ニュースルームはこちら!

<https://news-jp.churchofjesuschrist.org>



- アジア北地域、2022年に救い主の光で世界を照らす 1月16日リリース
- 福岡ディストリビューションサービスストアを奉献—地域会長会のラスバンド長老が奉献の祈りをささげる 1月10日リリース
- 2023年アジア北地域会長会年頭メッセージ 12月31日リリース
- 渡邊 驩兄弟、逝去される—主の業の見証者として歩んだ、90年の生涯 12月29日リリース
- 福岡ディストリビューションサービスストアがオープン—神殿参入者をはじめ、人々に仕える店舗を目指して 12月28日リリース

※上記リストは日本発信または日本に関連する記事のみです。海外発信記事(日本語)も数多く配信しています。

皆様の情報をお寄せください

会員の皆様の身近な話題をご紹介します

◎「リアホナ」日本語版編集室

〒106-0047 東京都港区南麻布5-8-8

TEL. 080-2391-8841 (担当: 岡田)

電子メール:

JPNLiahona@churchofjesuschrist.org

◎国際機関誌『リアホナ』のお届け、その他

商品に関するお問い合わせ—

教会配送センター

TEL. 03-5668-3391

FAX. 03-5668-3392

役員の変動

2022年12月21日から2023年1月22日までに教会組織指導者住所録で更新された役員の変動(敬称略)

- 北海道南ステーク 苦小牧支部
会長: 高橋 慶至
- 仙台東ステーク 泉ワード
ビショップ: 鈴木 崇夫
- 東京ステーク ふじみ川越ワード
ビショップ: 日坂 睦
- 名古屋ステーク 宮ワード
ビショップ: 富田 エイブラハム 圭太郎
- 岡山ステーク 津山支部
会長: 服鳥 道治

専任宣教師

●上から氏名、任地(伝道地)、出身ユニット、MTC入所日/着任日



佐崎 咲良

札幌伝道部
金沢ステーク
富山ワード
2022年5月24日
プロボ MTC 入所



中山 将之介

カリフォルニア州サンディエゴ伝道部
神奈川ステーク
湘南ワード
2022年8月6日
プロボ MTC 入所



福山 慶和

札幌伝道部
名古屋東ステーク
名東ワード
2022年8月15日
プロボ MTC 入所

*掲載は自己申告制です。宣教師の方は着任の前後に写真と情報を所定のウェブフォームまたはメールでお送りください。



幕の彼方から沖縄神殿へ続く道

——日本沖縄神殿の完成に家族歴史の書をささげる——佐久田 智子姉妹 千葉ステーキ鎌ヶ谷ワード

佐久田ご夫妻
壁の絵は智子姉妹が描いたもの
部屋中に作品が飾られている

19 67年、佐久田智子姉妹は沖縄県那覇市で生まれ、母親と、当時まだ教会員でなかった父親との6人兄妹の長女として育った。小学1年の頃だったろうか。母親と一緒にバスに揺られて親戚の家に行った記憶がある。親戚の人と楽しげに先祖の話をしたり熱心に書きつけたりしている様子から、何か聖いものを感じ、母は大切なことをしているのだと、おとなしく座っていたことを覚えている。

智子姉妹は26歳で佐久田朝男兄弟と結婚し、その年に長女が誕生、3人の子どもを授かる。実家は家から歩いて5分くらいの所にあり、幼い子どもたちを連れて頻りに立ち寄っていた。

もっと調べられることがあるのでは

ある日、智子姉妹は気がかりに思っていることを母親に尋ねる。「うちの系図はどうなっているの？」預言者たちは繰り返す、すべての教会員に家族歴史を調べるようにと教えている。親がどれだけ調べていたとしても、子にも責任がある。

それは自分の務めだと思っていた。「もう調べられるだけ調べたから、これ以上は調べられないと思うよ。親戚の所にも行ったし、焼けてしまってこれ以上の資料はないから。」母の言葉に智子姉妹は満たされず、「そうかなあ……」と返した。自分は母がやったことの一部しか見て



智子姉妹（前列右端）が小学生の頃の幸地家族6人兄妹だが、末の妹さん（四女）は早くに亡くなった

おらず、全体も見えていない。「もっと調べられることがあるのでは。やってみないと分からない。」少し疑問に思っていた。

1メートル四方の系図

一番下の子が2歳になった2002年頃、父方の遠い親戚が何の予告もなく訪ねてきて、約1メートル四方の家系図を父に手渡した。その人は他の親戚にも配り回っているようだった。「こんなのをもらったよ！」父がうれしそうに見せてくれた家系図には、ほぼ男性だけの227人の名前が連なっていた。さっそく、自分たちがどこにつながっているかと目と指で追い、父の名前を見つける。14代目の父の名は春雄、祖父は長春、長吉、長愛、長方……とたどっていくと、男性の名前は皆、代々「長」の字を冠している。「すごいが出てきたね」「すごいすごい」と盛り上がった。家系図は実家で父が保管し、家族皆が自由に見ることができた。「何もしないのに系図が出てくるんだ……。」智子姉妹は不思議に思った。

しかし、やる気が起きずそのまま放置



Uniting Families for Eternity—— 家族を永遠に

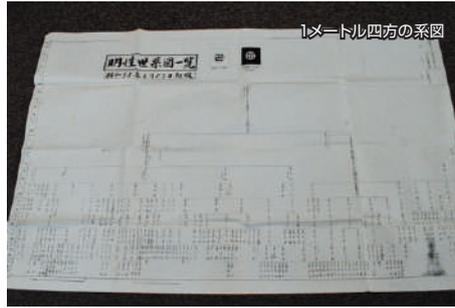
していると、これ以上後回しにはできないという強い思いが心に迫ってきた。2002年8月、とにかく何か行動を起こさないといけないと感じた智子姉妹は、思い切って親戚に聞いてみようと思決意する。しかし、いつどうすれば、それが可能なのか——。幸いにも沖縄のお盆(旧盆)が間近に控えていた。盛大に仏壇に供え物をして、先祖の霊を迎え入れてまた送り出すという3日間の伝統行事で、親族が実家を訪ねてくる。これまで親族とはあまり話したこともなく、教会に対する印象が良くないのも承知している。話をするのは怖くて勇気があるが、実行するという決意はひるまなかつた。智子姉妹は助けを求め、断食して祈る。これまでの経験から、主は助けてくださるという望みがあった。

—それは、ラバンから真鍮の版を得たニーファイのように、思いもよらない方法で実現することになる。

わずかの勇気と決意で手にした 11メートルの巻物

翌日、実家に行く前に買い物をしていたときだった。マッサージ業を営む妹(三女)からの電話が鳴った。「幸地(智子姉妹の旧姓)さんという、名前に『長』が付いている人が今お店に来ているよ。」

智子姉妹はすぐに1メートル四方の家系図を思い出し、その名前の付け方から親族だと確信する。妹の機転に感謝し、家系図を携えて急いだ。施術を終えるのを待ち、家系図を見せてあいさつをすると、その人は「これがわたしです」と自分の名前が書かれた箇所を指差した。そして驚くことに、智子姉妹が持っている家系図は原本の一部であり、「わたしはこの家系図が抜粋された基である、大き



な系図の巻物を持っています」と言うのだ。胸が高鳴った。その家系図をコピーさせてほしいと頼むと、すぐに快諾してくれた。後日、約束した日に訪問すると、見

せてくれたのは何メートルもあるような太い巻物だった。「こんなものがあるんですか!」思わず声が出た。家に帰って広げてみると11メートルもあった。

「ほんのわずかな勇気と決意、たった一日の断食と祈りによって、こんな大きな奇跡が起こるのはいったい何だろう。」先の奇跡と同様、不思議でならなかった。巻物は、探し回って見つけた印刷会社で2部コピーしてもらい、1部は実家に、1部は智子姉妹の手に置くことにした。

この巻物には、子孫に向けたメッセージが書かれていた。「この世系図は完全なものではなく、今後多くの資料が出揃い追加修正され、再版されることを期待してやまない。この世系図は男子だけにとどめておいたが、将来各小宗、または各宗家別にでも女子も含めたものが編集されれば幸いである。」智子姉妹は、昭和55年(1980年)にこの巻物を残した先祖の熱い思い、巻物を受けた者への切なる望みに心を留めた。うれしいことに、参考資料の一覧も出処も書かれている。那覇市歴史博物館と台北大学タイペイに行けば、さらに多くの先祖を探することができるのだ。

那覇市歴史博物館で入手した 7冊の家譜

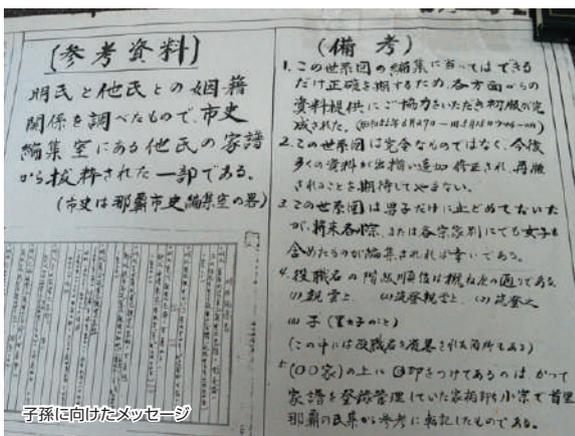
那覇市歴史博物館は実家の近くにある。館内は静かだった。案内されて資料室に行くと、明姓家譜と書かれた7冊の資料を抱えた職員が、奥の方から出て来た。「こんなすごいものが出てくるとは!」うれしさが込み上げる。

コピーは禁止されていたため、パソコンを持参し、資料を見ながら入力していく地道な作業が始まった。実家に子供を預けておおよそ週1回のペースで通い続けるが、1日2時間程度では少ししか入





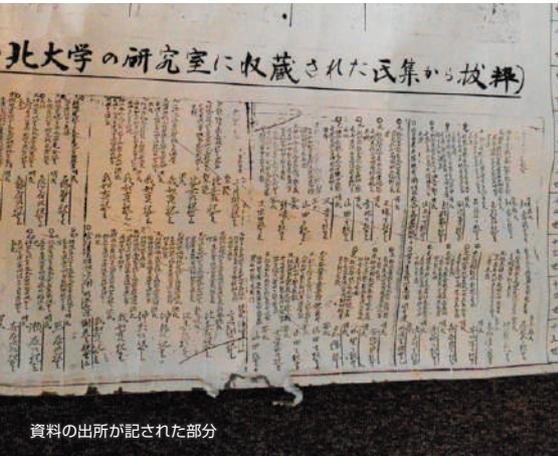
実家から一番近いビーチ。今でも帰省すると泳いでいる



子孫に向けたメッセージ



井上龍一兄弟



資料の出所が記された部分



実家に集まった親族たち



那覇市歴史博物館でコピーした家譜

力できず、遅々として進まない。終わりの見えない作業だったが、智子姉妹は黙々と取り組む。2003年から一部始終を見てきた職員から「あんた根性があるね。一緒にここで仕事をしないかい？」と声をかけられたほどだ。

2008年、資料をコピーして持ち帰れるという規則の変更があり、智子姉妹はすべてのコピーを終え、ようやく自宅で作業ができるようになった。規則の改正がなければ、入力を終える目はまったく立たなかった。神様の助けだと思った。

那覇市歴史博物館にあった7冊の家譜には約480人の名前があり、巻物に書かれた人と、巻物には書かれていない夫人たちを合わせると、儀式可能な人数は3,300人以上に及ぶことが分かった。

**あの巻物の入力が終わったら
何かが起きるかもしれませんね**

2010年、家族は朝男兄弟の仕事の都合で千葉県に引っ越した。巻物には父方の男性のみの家系図が、那覇市歴史

博物館で入手した家譜には家族の記録が載せられていた。引っ越し後はしばらく家族歴史には手をつけず、ファミリー・サーチにアカウントを作ったものの、どのように作業を進めていけばいいのかもよく分からない状態だった。

2013年の春だった。以前集っていた那覇ワードのセイン京子姉妹から電話がかかってきた。「沖縄の姉妹たちで手分けして、ファミリー・サーチへの入力をお手伝いしたいのですが、どうでしょうか？」智子姉妹はまったく予期しない申し出に非常に驚き、「すごく助けられた思い」がして、喜んで巻物の入力をお願いすることにした。この奉仕は、ワード・ステークの家族歴史相談員であるセイン姉妹が声をかけ、4人の家族歴史相談員と1人のボランティアの姉妹が協力した。彼らは智子姉妹が予備に印刷しておいた巻物を広げ、ワード・支部3つに分けて取り組もうと話し合い、それぞれ入力作業を開始する。そして2013年6月、わずか3か月足らずで、すべての作業を終

えたことを智子姉妹に伝えたのだった。ほぼ男性だけが記された巻物から入力できた名前は、2,500人以上にのぼった。

セイン姉妹はその経緯を次のように語る。「霊界にいる先祖を早く助けたい。せめてバプテスマだけでも早く、という思いでいっぱいでした。皆に、彼女の系図と一緒にやりましょうと声をかけたら、喜んで同意してくれました。周りはものすごい熱意ですから。」沖縄には、沖縄戦で亡くなった人も大勢いる。智子姉妹の先祖も同じ沖縄の先祖。ワードが違っても関係なかった。ステーク会長夫人で家族歴史相談員でもあった金城 文子姉妹もこの作業を助けた。金城姉妹はある日、当時夫婦宣教師として赴任していた井上 龍一長老から、「あの巻物をすべて入力することができたら、何かあるかもしれないですね」という言葉を聞く。「神殿・家族歴史が自分の信仰生活のすべて」という金城姉妹は、この言葉を重く受け止めた。沖縄の会員は長らく神殿建設を待ち望んでおり、「みんなで智子姉妹の家族

歴史を手伝って、多くの先祖の名前を出したら、沖縄に神殿ができるんじゃないか」という思いも、彼らの奉仕を後押ししたという。

融合作業は見落としていた人を救う大切なプロセス

それからまもなく、智子姉妹は鎌ヶ谷ワードの家族歴史相談員に召され、ちゃんと家族歴史に取り組もうと決意する。ファミリー・ツリーが新たに導入されたから、どう進めればよいのかよく分からなかったため、ワードの会員や自分の先祖のためにもしっかり学ぼうと思った。ファミリー・ツリーを進めていくにはまず、融合作業が必要だ。これに多くの会員が苦勞しており、少しでも早く役に立ちたいという思いも強かった。

巻物の入力には沖縄の姉妹たちに助けってもらったが、7冊の家譜の入力とすべての融合作業は自分の務めだ。智子姉妹はファミリー・ツリーの入力を進めながら、問題に突き当たるたびに家族歴史部へ電話で質問した。

ある時期、相談に応じたシェパード美智子姉妹は智子姉妹について、「彼女はすごく熱心なんですよ。ツリーの情報に関しても、少しでもおかしいと思うことがあったら何度でも電話をして、きちんと納得できるまで確認をする方なんですよね」と感心する。シェパード姉妹も、かつてボランティアとして沖縄で智子姉妹の巻物の入力を手伝った一人だ。毎晩取り組んだ入力作業には困難なこともあったが、そのたびに同じワードの金城姉妹から聞いた、井上兄弟のあの言葉を思い出したという。

智子姉妹の入力作業と融合作業は、沖縄の姉妹たちの奉仕や家族歴史相談



員の召し、家族歴史部の助けにより軌道に乗り、ワードの会員を助ける準備ともなった。智子姉妹にとって、会員たちの家族歴史の入力作業を手伝うのは、平安や喜び、先祖の存在や助けを感じる特別な時間でもあり、この召しに心から感謝したという。

智子姉妹は当初、多くの先祖の名前を一人一人融合していく作業があまり好きではなかった。非常に時間がかかり面倒だと感じていた。しかし、そのうち大事なことに気づく。忍耐強く作業を進めていくと、資料に名前があっても入力が漏れていた人、記録には載っていないけれど、よく読めば存在したはずの夫人や子どもなど、たくさんの人物が次々に出てきたのだ。一人でも見つけたときの喜びは忘れられない。融合作業はただの退屈で面倒な作業ではなく、わたしたちが終わったと思っている、家族歴史の探求と救いの儀式を再度見直し、見落としていた人たちを救うための大切な過程だった。融合作業で新たに追加できた名前

は300人を超えたという。

台湾訪問——父方、母方ともに琉球王国に繋がる

2017年10月に東京神殿が閉館したため、智子姉妹は福岡神殿や札幌神殿に参入するようになった。同年11月頃、初めて福岡神殿を訪れた智子姉妹は、神殿宿舎で同室になった二人の姉妹と知り合う。英語を流暢に話す日本人の姉妹と台湾の姉妹は、右も左もわからない智子姉妹を周辺の美味しいお店に案内し、友人になってくれた。通訳をしてくれたおかげで台湾の姉妹とも親しくなることができ、楽しい時間を過ごすうちに、気になっていた家族歴史に話が及んだ。

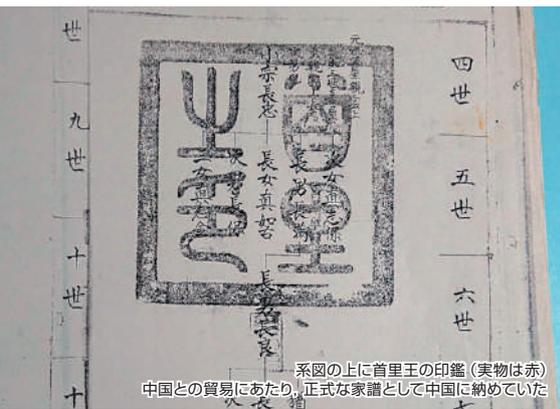
「わたしの先祖の資料が台湾の大学にあって、台湾に行きたいと思っています。」
「ぜひ台湾に来てください!」

彼女の笑顔と弾んだ声が心に響いた。

2018年7月、智子姉妹は妹(次女)と姪と共に、那覇空港から2泊3日の旅程で台湾へ飛んだ。台湾にはあつという間



Uniting Families
for Eternity——
家族を永遠に



系図の上に首里王の印鑑（実物は赤）
中国との貿易にあたり、正式な家譜として中国に納めていた

国立台湾大学の前で。左から、福岡神殿で出会った
台北神殿の儀式執行者で、智子姉妹の友人
妹さん（次女）
教会員ではないが通訳してくれた女性
姪ごさんと智子姉妹



に着いた。福岡で出会った姉妹が台湾台北神殿の儀式執行者だと知ったのは、神殿に着いてからだ。彼女は、日本から来た自分たちを心から歓迎し、参入する儀式に合わせて儀式執行者の割り当てを組み、神殿に着いてから帰りの空港に向かうまでずっと一緒に過ごし、親切を尽くしてくれた。

滞在2日目、彼女は日本語を話せる友人を連れて、神殿の宿舎に迎えに来てくれた。大学で資料を探すために、日本語が話せる人が必要と考えたのだろう。早速、目当ての台北大学を目指して出発するが、彼女たちは「すでにその大学はなくなって、後を継いだ大学があります」と言い、そこに案内してくれたのだった。大学に到着後、受付で資料を探す手続きをしてもらおうが、セキュリティが非常に厳しく、入館時にパスポートを預けなければならなかった。図書館に入る理由もこと細かく聞かれたが、これも日本語を話せる友人のおかげでクリアできた。「日本語と台湾の言葉が話せる人がいな

れば、大学に到着することも、セキュリティを通過することも、絶対できませんでした。」万事に神様の御手を感じた。最終的に、巻物に書かれていた資料はなかったものの別の資料が幾つか見つかり、その中には父方も母方も琉球王につながる事が分かる資料があり、コピーして持ち帰ることができたのだった。

敵対していた父方と母方の先祖

台湾を訪れる事前準備として、智子姉妹は巻物の筆頭にあった15代前の先祖の名前をインターネットで検索した。すると、父方も琉球王に関連している可能性があることがわかり、智子姉妹は初めて琉球王国に関心を持ったという。母親の熱心な家族歴史探求により、母方の先祖が琉球王につながることは知っていたが、そのことに特別な感情を抱いたことはなかった。しかし、もし父方も王の系譜につながるならば、先祖の名前が見つかる可能性は大幅に膨らみ、救いの儀式につながられる。そう思うとわくわくした。

台湾の大学から持ち帰った琉球王の資料をもとに、智子姉妹はさらに探求を進める。かつて沖縄には天孫氏てんそんしという、最初の両親のような人がいたというが、そこから25代目王までの記録はない。しかし、グスク時代^{*1}に存命した25代目王から琉球王国統一までの数百年、統一から現在までの約600年、連綿と家系図は続く。琉球王国は1429年から約450年間、南西諸島に存在した王制の国だ。父方と母方が琉球王につながると知った智子姉妹は、さらに興味深い事実じょうしに驚く。統一王朝の中で、第一尚氏王統は父方に、第二尚氏王統は母方につながっている。それは、母方の先祖が父方の先祖を失脚させ、王位を奪ったから

だった。父方と母方が敵対し合う関係にあり、母方が父方を滅ぼした——はるか昔の出来事が身近なことに思えて、面白かった。

母と行く、暮の彼方への伝道

帰国後、智子姉妹はいっそう家族歴史活動に励む。まず巻物と家譜の作業の完成を急いだ。家譜の入力と並行して行ってきた約3,300人の融合作業は、数年間かけてようやく終了。その後は見直し作業を進めているが、時々作業の途中で気になる人が出てきては、何度も立ち止まって調べるのだった。

2020年4月、また気になる人が出てくる。すぐにインターネットで検索して、那覇市歴史博物館に家譜があるかもしれないとの情報を得た。7月、智子姉妹は沖縄に帰省し、7月17日に那覇市歴史博物館を訪れる。新型コロナウイルスの感染拡大のために、入館は予約制で、人数制限と時間制限があった。検索していた家譜は先祖の家譜だと分かったが、その上の世代の家譜もあるような気がして係の人に問い合わせると、5冊の家譜を保管しているという。時間が限られているので、自分との関係を確認する余裕はない。すべてコピーを取って持ち帰ることにしたが、とても2時間で終わらせる量ではなかった。尋ねると、幸いにもその日は午後からの予約者がいないという。智子姉妹は昼をはさんで、4時間半かけて650枚ものコピーを終える。翌朝の飛行機で千葉に戻ることが決まっていた。那覇市歴史博物館は、沖縄県における感染拡大のため8月4日から当面休館にもなった。何もかもが間一髪のタイミングであった。

千葉に帰ってから資料を調べると、そ

※1 一沖繩・先島諸島・奄美群島の歴史における時代区分。諸説あるが、11世紀頃から15世紀にわたると言われる。城塞遺跡として今日に残る「城（グスク）」が多く築かれた



Uniting Families for Eternity—— 家族を永遠に

れらは容姓家譜という父方から出た家譜で、すべて自分につながるが分かった。喜びが込み上げた。ずっしりと重いコピーの束が約800人の救いにつながる資料だと思うとうれしくて、智子姉妹はフェイスブック上に資料の写真を添えて、このたびの体験を投稿する。「伝道の祝福ですね。」ある兄弟からもらったコメントが目にとまった。初めはどういう意味か分からなかった。自分はあまり伝道ができていない、そういつも感じていたからだ。そのときふいに、「2年前に亡くなった母が、霊界で伝道している。だからこの系図が出てきたのだ」と心を感じた。「わたしは母と一緒に伝道していたんだ……。」たまらなくなって、涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。

台湾を訪れる3か月前、母は闘病の末に亡くなった。母は生前、家族歴史に熱心に取り組み、親戚を訪れ、家系図をもとに探求してきたが、那覇市歴史博物館に先祖の資料があると知らなかった。

2022年10月、智子姉妹は新たに母方の家譜を手に入れる。父方に繋がる家譜にも手を広げており、いずれもおおざりにならないよう、琉球王、母方の家譜、父方に繋がる家譜と、曜日によって作業を分け、毎日取り組む。巻物から琉球王に結びつけ、さらにその家族や親族を次々につなげていく作業は、傍からは気が遠くなるように思えるが、智子姉妹は「もっともっとやりたい」と語る。「調べただけ出てくる」資料に追いついていけないほどだが、先祖の救いに関われる喜びが彼女を駆り立て、母親譲りの粘り強さで歩みを進める。

後に分かったことだが、訪れた大学は国立台湾大学であって、台北大学を継いだ大学ではなかった。しかも国立台北



智子姉妹の母の
幸地（大城）好子姉妹



母が調べた系図資料

大学はずっと存在している。自分たちはなぜ台北大学ではなく、違う大学に案内されたのか——智子姉妹は考える。たとえ台北大学で何十冊もの膨大な資料を入手したとして、難解な言葉を解説し、入力して儀式につなげるには途方もなく時間がかかっただろう。琉球王国に関する探求も、母の家系図を手がけることも、さらに先延ばしになったかもしれない。この体験が、今自分が進むべき方向を示す羅針盤のように思えた。

神殿が完成するときささげる 「そのまま受け入れるに値する書」

2019年4月の総大会で、ラッセル・M・ネルソン大管長は、沖縄神殿の建設を発表する。いつかいつかと待ち続けたこの日をセイン姉妹は、沖縄の「聖徒のほとんど全員が泣いた日」だと語る。歓喜した人々の中には、「井上兄弟の言葉を信じて、皆で一致して家族歴史を手伝って、終わらせたからではないか」と語る会員もいたという。

1972年、井上兄弟が初めて教会教育部の関係で沖縄を訪れた際、ある会員が戦跡を巡って案内してくれた。そのとき車の助手席で座っていた井上兄弟は、道の両側から「助けてほしい」と先祖の呼びかける声を聞いた思いがした。そして2004年3月、夫婦宣教師として沖縄に赴任したとき、大半の会員が先祖の記録をすでに終えていることを知り、会員の

信仰と先祖に寄せる強い思いに驚く。

2004年8月、那覇ワードでの宣教師大会において、ボイド・K・パッカー長老は「沖縄に神殿がいつ建つでしょうか」の宣教師の質問に対し、「それはわたしたちの手ではなく、皆さんの手にあると答えるのが良いと思います」と返した。この言葉に感じ入った井上兄弟は、帰還する直前のファイヤサイドで、自分たちを深く愛してくれた会員たちに再度その言葉を伝えて、伝道を終えたのだった。

今年2023年に予定されている日本沖縄神殿の奉獻式。建設は順調に進んでおり、神殿の外観は造園も含めてほぼ出来上がっている。金城姉妹は朝に夕に沖縄神殿に思いを馳せ、「今は迎える側として何をしなければならないか、そればかり考えています」と語る。セイン姉妹も言葉を添える。智子姉妹の系図を助けた後、「それは今では習わしとなり、誰かの系図が出てきたと聞いた時に、家族歴史相談員で手分けして入力を手伝い、神殿に名前を提出しています。」

「主の聖なる神殿が完成するとき、わたしたちの死者の記録を載せた、そのまま受け入れるに値する書をそこにささげましょう。」^{※2} 聖徒たちが熱心に探し求めた先祖や、沖縄戦で亡くなった大勢の人々の記録に加え、かつて一つの国として栄えた琉球王朝の系譜が沖縄神殿で救いの儀式にあずかる——その道が、今開かれようとしている。◆